

調査報告

## 血液データによる脱水評価について

脱水による循環血液量減少は、安全な離床を阻害するため重要なアセスメント項目である。脱水の評価として、血液データのBUN（尿素窒素）/Cre（クレアチニン）比が教科書的に有名であるが、臨床においてどの程度活用されている指標であるかは不明である。今回、BUN/Cre比の活用状況について調査したので報告する。

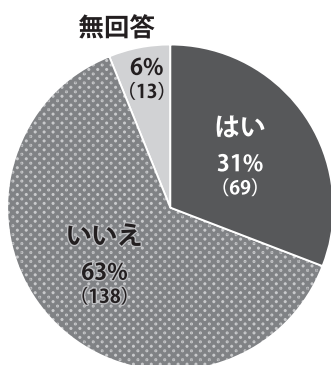
### 方法

調査期間：2019年1月12日～2019年1月27日  
調査対象：日本離床研究会教育講座の参加者のうち回答の得られた220名  
対象職種：看護師、理学療法士、作業療法士、言語聴覚士  
調査方法：質問紙法

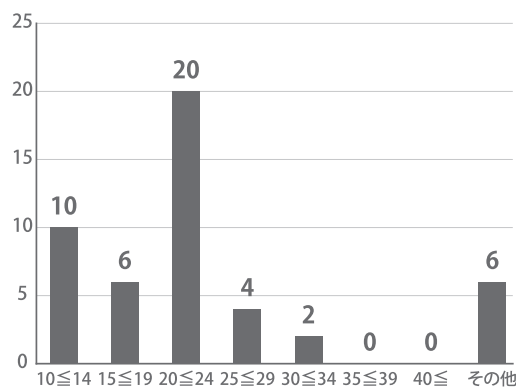
#### ●設問

- Q1. 皆さんの施設では、脱水の指標の一つとしてBUN/Cre比を使用していますか  
Q2. Q1で「はい」と回答された方に伺います。BUN/Cre比の値で脱水と疑う数値はいくつですか

### 結果



結果1 脱水の指標の一つとしてBUN/Cre比を使用しているか



結果2 BUN/Cre比の値で脱水と疑う数値はいくつか

### 考察

結果1より、6割以上の回答者はBUN/Cre比を脱水の指標として活用していないことが分かった。理由としては、脱水を知る指標として、皮膚の乾燥、尿量、鱗屑などのフィジカルアセスメントや、電解質による評価など、別の方法を活用している可能性が考えられる。

またBUN/Cre比は、脱水以外にも心不全や貧血でも高値となるため、脱水のみを疑う指標として活用されていないことが推察される。

結果2より、BUN/Cre比を指標とした場合に、脱水を疑う目安として、「20」という回答が最も多く、次いで「10」であった。一般にBUN/Cre比10以上で脱水を疑い、20以上ではより高度の脱水を疑う指標であり、一致する結果となった。

BUN/Cre比は、脱水に特化した検査ではないため、他の検査所見やフィジカルアセスメントとあわせて判断する必要がある。しかし、フィジカル所見の変化に乏しい高齢者においては、客観的数値が有用となる場合もあるため、BUN/Cre比を一つの指標として考慮すべきと考える。

著者情報：飯田 祥 \* 黒田智也 \* 曷川元 \*  
\*日本離床研究会 学術研究部